

高齢者の「生きがい」の規定要因について —「役割」と「孤独感」を中心とした分析—

日本福祉大学／みずほリサーチ&テクノロジーズ株式会社
藤森 克彦

はじめに

本稿では、高齢者の生きがいに、どのような要因が影響しているのかという点を考察する。「生きがい」は多義的な概念であるが、その一つの要素として「他者のためになる、あるいは、社会に役立っている」という意識や達成感があげられている¹。このように生きがいを捉えると、「役割」をもつことは、生きがいに肯定的な影響を与えると考えられる。

一方で、生きがいに否定的な影響を与えるものとして、「孤独感」があげられる。高齢期は、配偶者との死別や、他者との関係性が乏しくなることが考えられる。孤独感をもつことが、生きがいに否定的な影響を与えることが推察される。

そこで本稿では、高齢期の「生きがい」について、「役割」や「孤独感」との関連を中心に分析していく。具体的には、下記の点を考察する。

第一に、高齢者の生きがいについて、高齢者の「属性」や「役割」「孤独感」との関連性について考察する。役割としては、「家族内の役割の有無」「社会活動の参加の有無」「仕事の有無」の3点からみる。

第二に、高齢者の生きがいの規定要因を考察する。特に、「役割」や「孤独感」の有無は、高齢者の生きがいの規定要因になっているかという点を見る。

第三に、未婚の高齢者と離別した高齢者について、各々の生きがいの規定要因を考察する。後述する通り、未婚や離別は、高齢者の生きがいに負の影響を与える規定要因になっている。そこで、高齢者の中でも未婚者と離別者について生きがいの規定要因を考察する。

本稿の構成としては、まず、生きがいの有無について、属性、役割、孤独感との関連についてクロス集計から分析をする。次に、高齢者全体の生きがいの規定要因についてロジスティック回帰分析を行う。さらに、「未婚の高齢者」と「離別した高齢者」の生きがいの規定要因について、同様にロジスティック回帰分析を用いて分析をする。

1. 「属性」「役割」「孤独感」と生きがいの関連性

「生きがい」をもつ高齢者は、どのような特徴をもっているのだろうか。以下では、生きがいの有無を被説明変数として、「属性」「役割」「孤独感」との関連性を考察していく。

(1) 「生きがい」の有無に関する変数

最初に、被説明変数である「生きがい」の有無についてみていく。この変数は、「あなたは、現在、どの程度生きがい（喜びや楽しみ）を感じていますか」という設問（問39）を用いる。これは、「1. 十分感じている」「2. 多少感じている」「3. あまり感じていない」「4. まったく感じていない」の4件法で回答を求めている。本稿では、1と2の回答を「生きがいあり（生きがいを感じている）」、3と4の回答を「生きがいなし（生きがいを感じていない）」と整理する。

(2) 属性別にみた生きがい保有率

説明変数については、まず属性として、「性別」「年齢階層」「配偶関係」「世帯類型」「子

¹ 前田展弘（2020）「生きがいとは？その効果とは？」（ニッセイ基礎研究所『ジェロントロジー（高齢社会総合研究）』2020年11月26日）参照。

どもの有無」「主観的健康状態」「家計の心配事の有無」を用いてクロス集計を行う。具体的には、クロス集計のカイ二乗検定の結果、有意差が認められた場合には、どのセルが有意差をもたらしたかを明らかにするために残差分析を行った。残差分析によって出力される調整済み残差は、その絶対値が 1.96 以上であれば、5%水準で有意な差があると解釈できる。そこで、カイ二乗検定による有意が認められた場合には、該当のセルに注目することとし、下記のクロス表では調整済み残差が 1.96 以上のセルに網掛けをした。

まず、60歳以上の高齢者全体の生きがい保有率をみると、「あり」が78.3%、「なし」が21.7%となっている。高齢者の8割弱が、生きがいを保有している。

次に、男女別に生きがい保有率をみると、クロス表は $p=0.082$ となっていて、統計的に有意な差は認められない（図表1）。

また、年齢階層別に生きがい保有率をみると、クロス表は $p<0.001$ となり、統計的に有意になっている。そして、残差分析を行うと、「80歳以上」で生きがい保有率が全体に比して有意に低い（図表2）。

配偶関係別に生きがい保有率をみると、クロス表は $p<0.001$ となり、統計的に有意である。残差分析を行うと、未婚者、離別者、死別者は生きがい保有率が全体に比して有意に低い。一方、有配偶者は生きがい保有率が有意に高い（図表3）。

（図表1）男女別にみた生きがい保有率

性別		生きがいの有無		
		なし	あり	合計
男性	度数	261	865	1126
	%	23.2%	76.8%	100.0%
	調整済み残差	1.7	-1.7	
女性	度数	232	918	1150
	%	20.2%	79.8%	100.0%
	調整済み残差	-1.7	1.7	
合計	度数	493	1783	2276
	%	21.7%	78.3%	100.0%
n=2276 p=0.082				

（図表2）年齢階層別にみた生きがい保有率

年齢階層		生きがいの有無		
		なし	あり	合計
60～64歳	度数	74	301	375
	%	19.7%	80.3%	100.0%
	調整済み残差	-1.0	1.0	
65～69歳	度数	86	381	467
	%	18.4%	81.6%	100.0%
	調整済み残差	-1.9	1.9	
70～74歳	度数	112	473	585
	%	19.1%	80.9%	100.0%
	調整済み残差	-1.7	1.7	
75～79歳	度数	80	290	370
	%	21.6%	78.4%	100.0%
	調整済み残差	0.0	0.0	
80歳以上	度数	141	338	479
	%	29.4%	70.6%	100.0%
	調整済み残差	4.6	-4.6	
合計	度数	493	1783	2276
	%	21.7%	78.3%	100.0%
n=2276 p<0.001				

（図表3）配偶関係別にみた生きがい保有率

配偶関係別		生きがいの有無		
		なし	あり	合計
未婚	度数	62	78	140
	%	44.3%	55.7%	100.0%
	調整済み残差	6.7	-6.7	
有配偶	度数	269	1335	1604
	%	16.8%	83.2%	100.0%
	調整済み残差	-8.8	8.8	
離別	度数	49	80	129
	%	38.0%	62.0%	100.0%
	調整済み残差	4.6	-4.6	
死別	度数	112	286	398
	%	28.1%	71.9%	100.0%
	調整済み残差	3.5	-3.5	
合計	度数	492	1779	2271
	%	21.7%	78.3%	100.0%
n=2271 p<0.001				

（図表4）単身世帯と二人以上世帯別にみた生きがい保有率

世帯類型別		生きがいの有無		
		なし	あり	合計
単身世帯	度数	122	219	341
	%	35.8%	64.2%	100.0%
	調整済み残差	6.9	-6.9	
二人以上世帯	度数	371	1564	1935
	%	19.2%	80.8%	100.0%
	調整済み残差	-6.9	6.9	
合計	度数	493	1783	2276
	%	21.7%	78.3%	100.0%
n=2276 p<0.001				

単身世帯と二人以上世帯に分けて生きがい保有率をみると、クロス表は $p < 0.001$ となり、統計的に有意になっている。そして、残差分析を行うと、単身世帯の生きがい保有率は全体に比して有意に低い。一方、二人以上世帯の生きがい保有率は有意に高い（図表4）。

子どもの有無別に生きがい保有率をみると、クロス表は $p < 0.001$ となり、統計的に有意になっている。残差分析を行うと、子どものいない高齢者の生きがい保有率は全体に比して有意に低い。一方、子どものいる高齢者の生きがい保有率は有意に高い（図表5）。

主観的健康状態²別に生きがい保有率をみると、クロス表は $p < 0.001$ となり、統計的に有意になっている。残差分析を行うと、主観的健康状態が良くない高齢者の生きがい保有率は全体に比して有意に低い。一方、主観的健康状態の良い高齢者の生きがい保有率は有意に高い（図表6）。

家計の心配事の有無別に生きがい保有率をみると、クロス表は $p < 0.001$ となり、統計的に有意になっている。そして、残差分析を行うと、家計に心配事のある高齢者で生きがい保有率が全体に比して有意に低い。一方、家計の心配事のない高齢者では生きがい保有率が有意に高い（図表7）。

（図表5）子どもの有無別にみた生きがい保有率

子どもの有無		生きがいの有無		
		なし	あり	合計
子どもなし	度数	91	168	259
	%	35.1%	64.9%	100.0%
	調整済み残差	5.6	-5.6	
子どもあり	度数	398	1607	2005
	%	19.9%	80.1%	100.0%
	調整済み残差	-5.6	5.6	
合計	度数	489	1775	2264
	%	21.6%	78.4%	100.0%
n=2264 p<0.001				

（図表6）主観的健康状態別にみた生きがい保有率

主観的健康状態		生きがいの有無		
		なし	あり	合計
良くない	度数	244	334	578
	%	42.2%	57.8%	100.0%
	調整済み残差	14.0	-14.0	
良い	度数	245	1445	
	%	14.5%	85.5%	100.0%
	調整済み残差	-14.0	14.0	
合計	度数	489	1779	2268
	%	21.6%	78.4%	100.0%
n=2268 p<0.001				

（図表7）家計の心配事の有無別にみた生きがい保有率

家計の心配事		生きがいの有無		
		なし	あり	合計
心配事あり	度数	264	459	723
	%	36.5%	63.5%	100.0%
	調整済み残差	11.8	-11.8	
心配事なし	度数	227	1318	1545
	%	14.7%	85.3%	100.0%
	調整済み残差	-11.8	11.8	
合計	度数	491	1777	2268
	%	21.6%	78.4%	100.0%
n=2268 p<0.001				

² 主観的健康状態については、「あなたの現在の健康状態はいかがですか」という設問（F11）に対して、「1. 良い」「2. まあ良い」「3. 普通」「4. あまり良くない」「5. 良くない」の5件法で回答を求めている。本稿では、1～3を「良い」、4～5を「良くない」と整理した。

(3)「役割」の有無と生きがい保有率との関連について

次に、「役割」の有無と生きがい保有率の関連性についてみていく。ここでは、「役割」として、「家族内の役割の有無」「社会活動の参加の有無」「仕事の有無」の3点をみる。

具体的には、家族内の役割については、「あなたはご家族や親族の方々の中でどのような役割を果たしていると感じていますか」という設問(問5)について、「1. 家事を担っている」「2. 小さな子どもの世話をしている」「3. 家族・親族の相談相手になっている」「4. 家族の経済的な支え手(かせぎ手)である」「5. 家族や親族関係の中の長(まとめ役)である」「6. 家族や障害を持つ家族・親族の世話や介護をしている」「7. その他」「8. 特に役割はない」から複数回答を求めている。このうち、「8. 特に役割はない」を選択すれば、「家族内の役割なし」とし、1～7のいずれかを選択すれば「家族内の役割あり」とした。

また、社会活動としては、「あなたは、この1年間に個人または友人あるいはグループや団体で自主的に行われている次のような活動を行った、または参加しましたか」という設問(問22)について、「1. 趣味(俳句、詩吟、陶芸等)」「2. 健康・スポーツ(体操、歩こう会、ゲートボール等)」「3. 生産・就業(生きがいのための園芸・飼育、シルバー人材センター等)」「4. 教育関連・文化啓発活動(学習会、子ども会の育成、郷土芸能の伝承等)」「5. 生活環境改善(環境美化、緑化推進、まちづくり等)」「6. 安全管理(交通安全、防犯・防災等)」「7. 高齢者の支援(家事援助、移送等)」「8. 子育て支援(保育への手伝い等)」「9. 地域行事(祭りなどの地域の催しものの世話等)」「10. その他」「11. 活動または参加したものはなし」から複数回答を求めている。このうち、「11. 活動または参加したものはなし」を選択した場合、「社会活動の参加なし」とし、他の1～10のいずれかを選択すれば「社会活動の参加あり」とした。

さらに、「仕事の有無」については、「あなたは、現在、収入のある仕事をしていますか」という設問(F6)について、「1. 自営農林漁業(家族従業者も含む)」「2. 自営商工サービス業(家族従業者も含む)」「3. 会社または団体の役員」「4. フルタイムの被雇用者」「5. パートタイム・臨時の被雇用者」「6. 収入の伴う仕事はしていない」から一つを選択することを求めている。このうち、「6. 収入の伴う仕事はしていない」を選択すれば「仕事なし」として、1～5のいずれかを選択すれば「仕事あり」とした。

A. 「家族」「社会活動」「仕事」における役割の有無と生きがい保有率

その結果、まず、家族内の役割の有無別に生きがい保有率をみると、クロス表は $p < 0.001$ となり、統計的に有意になっている。残差分析を行うと、家族内に役割をもつ高齢者の生きがい保有率は全体に比して有意に高い。一方、家族内に役割をもたない高齢者の生きがい保有率は有意に低い(図表8)。

社会活動の参加の有無別に生きがい保有率をみると、クロス表は $p < 0.001$ となり、統計的に有意になっている。残差分析を行うと、社会活動に参加している高齢者の生きがい保有率は全体に比して有意に高いのに対して、参加していない高齢者の生きがい保有率は有意に低い(図表9)。

仕事の有無別に生きがい保有率をみると、クロス表は $p < 0.001$ となり、統計的に有意になっている。残差分析を行うと、仕事をもつ高齢者の生きがい保有率は全体に比して有意に高いのに対して、仕事をしていない高齢者の生きがい保有率は有意に低い(図表10)。

(図表8) 家族内の役割の有無と生きがい保有率

家族内の役割		生きがいの有無		
		なし	あり	合計
役割なし	度数	243	322	565
	%	43.0%	57.0%	100.0%
	調整済み残差	14.2	-14.2	
役割あり	度数	250	1461	1711
	%	14.6%	85.4%	100.0%
	調整済み残差	-14.2	14.2	
合計	度数	493	1783	2276
	%	21.7%	78.3%	100.0%
n=2276 p<0.001				

(図表9) 社会活動の参加の有無と生きがい保有率

社会活動		生きがいの有無		
		なし	あり	合計
不参加	度数	316	651	967
	%	32.7%	67.3%	100.0%
	調整済み残差	11.0	-11.0	
参加	度数	177	1132	1309
	%	13.5%	86.5%	100.0%
	調整済み残差	-11.0	11.0	
合計	度数	493	1783	2276
	%	21.7%	78.3%	100.0%
n=2276 p<0.001				

(図表10) 仕事の有無別にみた生きがい保有率

仕事		生きがいの有無		
		なし	あり	合計
仕事なし	度数	357	1022	1379
	%	25.9%	74.1%	100.0%
	調整済み残差	5.9	-5.9	
仕事あり	度数	132	729	861
	%	15.3%	84.7%	100.0%
	調整済み残差	-5.9	5.9	
合計	度数	489	1751	2240
	%	21.8%	78.2%	100.0%
n=2240 p<0.001				

B. 「家族」「社会活動」「仕事」における役割の個数と生きがい保有率

次に、「家族内の役割」「社会活動」「仕事」といった3つの役割のうち、高齢者が担っている役割の個数と生きがい保有率との関係を見る。役割の個数は、最低で「0個」、最大で「3個」となる。

その結果、役割の個数別に生きがいの保有率をみると、クロス表は $p<0.001$ となり、統計的に有意になっている。残差分析を行うと、役割が「0個」あるいは「1個」の高齢者の生きがい保有率は全体と比して有意に低いのに対して、「2個」あるいは「3個」の高齢者の生きがいの保有率が有意に高い（図表11）。

(4) 孤独感と生きがいとの関係について

次に、孤独感と生きがいとの関係についてみていく。孤独感については、「(イ) 自分には人との付き合いがないと感じることがありますか」「(ロ) 自分は取り残されていると感じることがありますか」「(ハ) 自分は他の人たちから孤立していると感じることはありますか」という3つの設問について、「決してない」「ほとんどない」「時々ある」「常にある」の4件法で回答を求めている。そこで、各設問の選択肢について「決してない」を1点、「ほとんどない」を2点、「時々ある」を3点、「常にある」を4点と点数化し、さらに3つの設問の点数を合計して「3～5点」「6点」「7～8点」「9～12点」に区分した。

その結果、孤独感の点数別に生きがいの保有率をみると、クロス表は $p < 0.001$ となり、統計的に有意になっている。残差分析を行うと、孤独感の点数が「3～5点」「6点」の高齢者の生きがい保有率は全体に比して有意に高い。一方、「7～8点」「9～12点」の高齢者の生きがい保有率は有意に低い（図表 12）。

（図表 11） 役割の個数と生きがいの有無

役割をいくつもっているか		生きがいの有無		
		なし	あり	合計
0 個	度数	144	107	251
	%	57.4%	42.6%	100.0%
	調整済み残差	14.5	-14.5	
1 個	度数	173	431	604
	%	28.6%	71.4%	100.0%
	調整済み残差	4.7	-4.7	
2 個	度数	133	799	932
	%	14.3%	85.7%	100.0%
	調整済み残差	-7.3	7.3	
3 個	度数	39	414	453
	%	8.6%	91.4%	100.0%
	調整済み残差	-7.6	7.6	
合計	度数	489	1751	2240
	%	21.8%	78.2%	100.0%

n=2240 p<0.001

（図表 12）孤独感の点数別にみた生きがい保有率

孤独感		生きがいの有無		
		なし	あり	合計
3～5点	度数	58	551	609
	%	9.5%	90.5%	100.0%
	調整済み残差	-8.4	8.4	
6点	度数	85	629	604
	%	11.9%	88.1%	100.0%
	調整済み残差	-7.6	7.6	
7～8点	度数	131	383	514
	%	25.5%	74.5%	100.0%
	調整済み残差	2.5	-2.5	
9～12点	度数	205	185	453
	%	52.6%	47.4%	100.0%
	調整済み残差	16.4	-16.4	
合計	度数	479	1748	2227
	%	21.5%	78.5%	100.0%

n=2227 p<0.001

2. 高齢者の「生きがい」の規定要因の分析

それでは、高齢者の生きがいの規定要因は何か。特に、「役割」や「孤独感」は、高齢者の「生きがい」の規定要因になっているのだろうか。

（1）分析方法

本節では、「生きがいあり」を1、「生きがいなし」を0とする二値変数を被説明変数とするロジスティック回帰分析を行った。説明変数としては、記述統計量に示した通りである（図表 13）。

(図表 13) 使用する変数の記述統計量

	有効度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
男性ダミー	2435	0.00	1.00	0.49	0.500
年齢	2435	60.00	103.00	73.12	8.070
単身世帯ダミー	2435	0.00	1.00	0.15	0.358
未婚ダミー	2430	0.00	1.00	0.06	0.238
有配偶ダミー	2430	0.00	1.00	0.70	0.457
離別ダミー	2430	0.00	1.00	0.06	0.231
死別ダミー	2430	0.00	1.00	0.18	0.385
子どもありダミー	2423	0.00	1.00	0.89	0.317
主観的健康状態良いダミー	2427	0.00	1.00	0.74	0.440
家計の心配事ないダミー	2427	0.00	1.00	0.68	0.467
家族内に役割ありダミー	2435	0.00	1.00	0.74	0.438
社会活動参加ダミー	2435	0.00	1.00	0.58	0.493
仕事ありダミー	2393	0.00	1.00	0.38	0.485
孤独感 3～5 点ダミー	2352	0.00	1.00	0.28	0.448
孤独感 6 点ダミー	2352	0.00	1.00	0.32	0.466
孤独感 7～8 点ダミー	2352	0.00	1.00	0.23	0.419
孤独感 9～12 点ダミー	2352	0.00	1.00	0.18	0.381

(2) 分析の結果

分析結果としては、まずカイ二乗検定は $p < 0.001$ で有意となっている (図表 14)。分析に投入した変数の有意確率をみると、未婚ダミー、離別ダミー、主観的健康状態良いダミー、家計の心配事ないダミー、家族内に役割ありダミー、社会活動参加ダミー、孤独感 7～8 点ダミー、孤独感 9～12 点ダミーは、5%水準で有意である。つまり、これらの変数は、高齢者の生きがいの有無に影響を与えている。

(図表 14) 高齢者の生きがいの有無の規定要因 (ロジスティック回帰分析)

	回帰係数	オッズ比	有意確率
男性ダミー	-0.246	0.782	
年齢	0.017	0.983	
単身世帯ダミー	0.083	1.086	
未婚ダミー	-0.719	0.487	*
離別ダミー	-0.665	0.514	*
死別ダミー	-0.271	0.763	
子どもありダミー	0.014	1.014	
主観的健康状態良いダミー	0.804	2.234	***
家計の心配事ないダミー	0.860	2.363	***
家族内に役割ありダミー	0.785	2.193	***
社会活動参加ダミー	0.727	2.069	***
仕事ありダミー	0.257	1.293	
孤独感 3～5 点ダミー	0.204	1.226	
孤独感 7～8 点ダミー	-0.672	0.511	***
孤独感 9～12 点ダミー	-1.498	0.224	***
(定数)	1.240	3.455	
n	2176		
Nagelkerke R2 乗	0.351		
尤度比のカイ二乗検定	$P < 0.001$		

- (注) 1. リファレンスグループは、「有配偶」、「孤独感=6点」。
2. *** $p < 0.001$ ** $p < 0.01$ * $p < 0.05$

このうち、主観的健康状態良いダミー、家計の心配事ないダミー、家族内に役割ありダミー、社会活動参加ダミーは、回帰係数の符号がプラスであり、生きがいに正の影響を与えている。つまり、健康状態が良い人、家計に心配事のない人、家族内に役割のある人、社会活動に参加している人は、生きがいをもちやすい。

一方、未婚ダミー、離別ダミー、孤独感7～8点ダミー、孤独感9～12点ダミーは、回帰係数の符号がマイナスであり、生きがい保有に負の影響を与えている。つまり、未婚者や離別者は、有配偶者を基準にすると、生きがいをもちにくい。また、孤独感7～8点ダミー、孤独感9～12点ダミーでは、孤独感6点に比べて、生きがいをもちにくい。

3. 「未婚の高齢者」と「離別した高齢者」の生きがいの規定要因

前節でみたように、「未婚」と「離別」は、「有配偶」と比べて、高齢者の生きがい保有に負の影響を与える規定要因と考えられる。では、「未婚の高齢者」と「離別した高齢者」の生きがいの規定要因は何だろうか。それぞれについて、生きがいの規定要因を分析する。

(1) 分析方法

「生きがいあり」を1、「生きがいなし」を0とする二値変数を被説明変数とするロジスティック回帰分析を行った。説明変数としては、記述統計量に示した通りである(図表15)。なお、未婚者については、子どもをもつ人の比率が極めて低いことから、説明変数から「子どもありダミー」を除いてロジスティック回帰分析を行った。

(図表 15) 使用する変数の記述統計量

		有効度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
男性ダミー	未婚	147	0.00	1.00	0.65	0.480
	離別	137	0.00	1.00	0.44	0.498
年齢	未婚	147	60.00	94.00	69.92	7.297
	離別	137	60.00	99.00	71.18	7.169
単身世帯ダミー	未婚	147	0.00	1.00	0.67	0.473
	離別	137	0.00	1.00	0.57	0.497
子どもありダミー	未婚	144	0.00	1.00	0.02	0.143
	離別	137	0.00	1.00	0.85	0.354
主観的健康状態良いダミー	未婚	146	0.00	1.00	0.66	0.474
	離別	137	0.00	1.00	0.61	0.490
家計の心配事ないダミー	未婚	146	0.00	1.00	0.60	0.492
	離別	137	0.00	1.00	0.50	0.502
家族内に役割ありダミー	未婚	147	0.00	1.00	0.44	0.498
	離別	137	0.00	1.00	0.56	0.498
社会活動参加ダミー	未婚	147	0.00	1.00	0.44	0.498
	離別	137	0.00	1.00	0.50	0.502
仕事ありダミー	未婚	145	0.00	1.00	0.34	0.475
	離別	134	0.00	1.00	0.47	0.501
孤独感3～5点ダミー	未婚	140	0.00	1.00	0.12	0.328
	離別	133	0.00	1.00	0.24	0.429
孤独感6点ダミー	未婚	140	0.00	1.00	0.29	0.453
	離別	133	0.00	1.00	0.26	0.442
孤独感7～8点ダミー	未婚	140	0.00	1.00	0.24	0.430
	離別	133	0.00	1.00	0.25	0.434
孤独感9～12点	未婚	140	0.00	1.00	0.35	0.479
	離別	133	0.00	1.00	0.25	0.434

(2) 分析結果

A. 未婚の高齢者

未婚の高齢者の分析結果としては、まずカイ二乗検定は $p < 0.001$ で有意となっている(図表 16)。分析に投入した変数の有意確率をみると、単身世帯ダミー、孤独感 9～12 点ダミーは、5%水準で有意である。つまり、これらの変数は、未婚の高齢者の生きがいに有意な影響を与えている。

このうち、単身世帯であることは、未婚の高齢者の生きがい保有に正の影響を与えている。つまり、未婚の高齢者において、単身世帯であることは、二人以上世帯に比べて生きがいを保有しやすい。

一方、孤独感が高いことは、生きがい保有に負の影響を与えている。つまり、孤独感 9～12 点の未婚の高齢者は、孤独感 6 点の未婚の高齢者に比べて、生きがいを保有しにくい。

(図表 16)「未婚の高齢者」と「離別した高齢者」の生きがいの規定要因

	未婚の高齢者			離別した高齢者		
	回帰係数	オッズ比	有意確率	回帰係数	オッズ比	有意確率
男性ダミー	-0.679	0.507		0.001	1.001	
年齢	0.048	1.049		-0.016	0.984	
単身世帯ダミー	1.046	2.846	*	-0.377	0.686	
子どもありダミー				0.554	1.740	
主観的健康状態良いダミー	0.907	2.477		1.152	3.164	*
家計の心配事ないダミー	0.908	2.479		0.992	2.697	*
家族内に役割ありダミー	0.750	2.117		0.728	2.071	
社会活動参加ダミー	0.317	1.373		0.615	1.850	
仕事ありダミー	0.233	1.262		0.477	1.612	
孤独感 3～5 点ダミー	1.169	3.219		-0.415	0.661	
孤独感 7～8 点ダミー	-0.917	0.400		-0.638	0.528	
孤独感 9～12 点	-1.253	0.286	*	-1.852	0.157	**
(定数)	-4.425	0.012		0.156	1.168	
n	134			124		
Nagelkerke R2 乗	0.416			0.409		
尤度比のカイ二乗検定	$p < 0.001$			$p < 0.001$		

(注) 1. リファレンスグループは、「孤独感=6 点」。

2. *** $p < 0.001$ ** $p < 0.01$ * $p < 0.05$

B. 離別した高齢者

離別した高齢者の分析結果としては、まずカイ二乗検定は $p < 0.001$ で有意となっている(図表 16)。分析に投入した変数の有意確率をみると、主観的健康状態良いダミー、家計の心配事ないダミー、孤独感 9～12 点ダミーは、5%水準で有意である。つまり、これらの変数は、離別した高齢者の生きがい保有に影響を与えている。

そして、主観的健康状態良いダミーと家計の心配事ないダミーは、生きがい保有に正の影響を与えている。一方、孤独感 9～12 点ダミーは、孤独感 6 点の高齢者に比べて、生きがい保有に負の影響をもたらしている。つまり、孤独感の高い人は、相対的に孤独感が低い人に比べて、生きがいをもちにくいといえる。

4. まとめ

以上のように、高齢者全体の生きがい保有に正の影響をもたらす規定要因としては、主観的健康状態が良いこと、家計に心配事がないこと、家族内に役割があること、社会活動に参加していること、があげられる。一方、高齢者の生きがい保有に負の影響をもたらす規定要因としては、未婚であること、離別していること、孤独感が高いことがあげられる。

本稿で着目した「役割」や「孤独感」という点では、家族について役割をもつことや社会活動に参加することは、高齢者の生きがいにも正の影響をもたらす要因といえる³。一方、孤独感、高齢者の生きがいにも負の影響をもたらす要因である。

次に、「未婚の高齢者」や「離別した高齢者」について生きがいの規定要因をみると、孤独感が高いと生きがいにも負の影響をもたらす規定要因になっていることは共通である。

一方、「未婚の高齢者」については、単身世帯であることが二人以上世帯であることに比べて生きがい保有に正の影響をもたらす規定要因となっている。これは、やや意外な結果である。この点、未婚の高齢者が二人以上世帯となる場合、子どもが同居人になる比率は極めて低く、兄弟姉妹や親（本人または配偶者の親）が同居人になることが考えられる。実際、本調査では、二人以上世帯に属する未婚の高齢者の同居人の比率をみると、兄弟姉妹 57.1%、親 24.5%、子 4.1%、その他 16.3%となっている。そして、未婚の高齢者が親と同居する場合、親がかなり高齢であることが考えられ、要介護状態であることも少なくないと思われる。また、兄弟姉妹と同居している場合も、一定程度介護を必要としている兄弟姉妹がいる可能性がある。二人以上世帯に属する未婚の高齢者が、単身世帯に属する未婚の高齢者に比べて、生きがいを持ちにくい背景には、こうした「老老介護」が要因になっているのかもしれない。

また、「離別した高齢者」では、家計の心配事がないことや、主観的健康状態が良いことは、そうでない場合に比べて、生きがいにも正の影響をもたらす規定要因になっている。

以上のように、全体として高齢期に生きがいをもつには、良い健康状態や家計に心配事がないことに加えて、家族内で役割をもつことや社会活動に参加すること、さらに孤独感が低いことが重要だと考えられる。

以上

³ なお、仕事をもつことは必ずしも有意な差が認められないが、 $p=0.083$ であり有意傾向にある差が認められる。

